

特別陳列「畠田和一貝類コレクション展2 畠田和一が採集していた岡山県の絶滅種1」

2020年4月11日（土）～9月27日（日）

大規模な内湾奥部の干潟や河口汽水域に特異的な種

展示する種（12種）：シマヘナタリ、クロヘナタリ、タケノコカワニナ、ウネハナムシロ、キヌカツギハマシイノミ、ハイガイ、ササゲミミエガイ、アゲマキ、チリメンユキガイ、ウラカガミ、ハマグリ、ハナグモリ。

これらの種の直接的かつ最大の絶滅要因は、1959年の児島湾閉め切り淡水化である。岡山県南部の干拓事業は奈良時代に開始され、長い年月にわたってたゆまず継続されてきたため、戦前の時点で既に広い範囲が陸地化していたものの、それでもまだ1950年代前半までは、児島湾奥部に決して狭くない泥質干潟が残されていた。そこには依然としてハイガイをはじめとする干潟特有の貝類相が見られ、明治時代に有明海から移植されて根付いたアゲマキも多産し、盛んに漁獲対象とされていたが、湾の閉め切りによって棲息可能な環境を一挙に奪われ、ことごとく絶滅した。

閉め切り堤防の内側だけでなく、外側に位置する吉井川や旭川の河口においても同時期に大規模な護岸が施され、水辺が直線的に単純化されたことで土砂の堆積が妨げられ、ヨシ原や干潟が失われた。護岸それ自体の影響だけでなく、児島湾閉め切り堤防の設置によって、その外側における海水の流れ全体が大幅に変更され、土砂の堆積に変化をもたらしたことも関係している。

笠岡湾でも同様に干拓が進められた結果、棲息可能な範囲が著しく狭められ、さらに高度経済成長期の水質悪化によって大半の種が死滅した。県東部の備前市周辺では片上湾などに比較的良好な干潟は残存しているが、同地でもハマグリが見られなくなるなど、貝類の多様性の低下が進んでいる。
(岡山大学 福田宏)

シマヘナタリ

Cerithidea tonkiniana Mabilie, 1887

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：オニノツノガイ亜区：オニノツノガイ
上科：キバウミニナ科)

展示標本： #238 邑久郡幸西村 [現・岡山市東区西幸西・東幸西]，1956
年3月21日

大規模な内湾奥の河口汽水域において、軟泥底に生じたヨシ原の飛沫帯～潮間帯上部に特異的に見られる。地表を匍匐するのみならず走上性が強く、ヨシの茎や岩壁へ高さ2 m程度まで登る。宏大な泥干潟を擁する朝鮮半島や中国では広範囲に多産するが、日本ではもともと不連続かつ局所的に産する。戦後の沿岸開発に伴う河口塩性湿地の減少とともに多くの産地が失われ、東京湾と玄界灘で絶滅し、有明海でも1997年の諫早湾閉め切り以後、長崎県でほぼ全ての個体群が消滅するなど減少傾向が著しい。現在辛うじてまとまった個体群が保たれているのは周防灘（山口・福岡・大分各県）と八代海の一部に限られる。クロヘナタリと並び、汽水域のヨシ原の消失とそこに特異的な生物群集の崩壊を象徴する種の一つである。周防灘の各産地は1985年に再発見されるまでほとんど知られておらず、それ以前は児島湾が瀬戸内海唯一の産地とされていた。

児島湾で最初に本種を見出したのは恐らく畠田和一人で、そのコレクションにはここに展示した標本のほか、「[昭和] 14 [= 1939]. 1. 4. (黒田徳米氏同定品)」と戦前の日付のある「児島郡甲浦村 [現・岡山市南区] 郡」の標本(2個体, #7071) が現存し、これら2産地はそれぞれ児島湾南岸と吉井川河口左岸に相当する。また古川田溝と野口博がそれぞれ築き上げたコレクション(それぞれ、福井市自然史博物館と東海大学自然史博物館所蔵)にも本県産標本が含まれており、それらも恐らく畠田が1950年代までに採集して提供したものと推測される。

しかし1959年の児島湾閉め切りを機に、県内の全ての産地が壊滅した。甲浦村郡は閉め切り堤防のちょうど南端にあたるため、同地の個体群は工事の際に既に潰されていた可能性が高い。また湾外に位置する吉井川河口もコンクリート護岸によってヨシ原や干潟が奪われ、岸辺の地形が単純化したことで消失したと考えられる。1960年代以降、岡山県で本種とクロヘナタリの生貝が確認された例は一切ない。1994年末に岡本正豊が水産庁の嘱を受けて本種とクロヘナタリの全国の現状を調査した際、児島湾の両種の存否について地元の佐藤國康に照会した。佐藤は旭川・吉井川両河口を含む児島湾一帯を満遍なく探索したものの両種は遂に一切見出されず、その時点で完全に絶滅したと結論付けられた。



クロヘナタリ

Cerithiopsis largillierti (Philippi, 1848)

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：オニノツノガイ亜区：オニノツノガイ
上科：キバウミニナ科)

展示標本： #2974 西大寺市 [現・岡山市東区] 西幸西，波部 [忠重] 氏
同定 1956 年 9 月

多くの場合シマヘナタリと随伴し、内湾奥河口汽水域のヨシ原周辺の軟泥底に見られるが、シマヘナタリが飛沫帯～潮間帯上部に見られ、乾燥した場所へも積極的に登ってゆくのとは対照的に、本種はほとんど走上傾向を見せず、活動範囲は潮間帯中～下部の水分の多い地表に限定される。干潮時は泥上に残された浅い水溜まりにとどまり、盛夏に水温 40 度を超えても活潑に匍匐する。しかしヨシ原への依存はシマヘナタリともども強く、植生のない干潟に見られることは少ない。このため後種と同様の要因によって戦後の日本で急激に減少した。東京湾では明治時代から産出が知られていたが、近年はごく稀に古い死殻が見られるのみで、絶滅したと考えられる。大村湾でも 1990 年代半ばの時点で棲息に関する情報が得られていないとされ、その後も確認されていない。有明海もシマヘナタリ同様に長崎県でほぼ消滅するなど、全体的に甚だしく減少しており、もはや周防灘西部と八代海の決して広くない範囲に残るだけである。

児島湾は、周防灘に面した山口県小野田市周辺とともに、瀬戸内海における数少ない本種の産地として知られていた。しかし岡山県産シマヘナタリの標本が本県以外の複数の博物館にも現存するのに対し、本種の標本は現時点で、ここに展示した畠田和一の蒐

集品以外に見当たらない。同じ産地（吉井川河口左岸）からはシマヘナタリの標本も残されている。本種もシマヘナタリと同じく、児島湾の閉め切りや吉井川河口の護岸によって棲息環境が奪われ、さらに本種の場合はシマヘナタリより水に近い位置に産するため、水質汚染も致命的な打撃を与えた可能性が高い。それ以降岡山県で本種の棲息が確認された例は一切なく、1990 年代半ばの佐藤國康による調査の時点で既に完全に絶滅していた。



タケノコカワニナ（ムチカワニナ）

Stenomelania torulosa (Bruguière, 1789)

（腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：オニノツノガイ亜区：オニノツノガイ
上科：トゲカワニナ科）

展示標本： #2987 上道郡津田村
[現・岡山市東区君津・升田]，黒田
[徳米]氏同定品 1950年7月22日

本種は近年まで種子島以北に固有とされてきたが，Hidaka & Kano (2014) による分子系統解析の結果，奄美大島以南の亜熱帯・熱帯域から知られていたムチカワニナと同種であることが明示された。

河口汽水域の緩い流水または止水
中において，粗砂底・砂泥底・軟泥底
の表層に棲み，干潮時には滯筋や水
溜まりの中で匍匐する。両側回游性
で海流に乗じて分散し，特に紀伊半
島以西の太平洋岸や東シナ海沿岸に
産地が点在するが，本州日本海側で
は著しく稀産である。瀬戸内海でも
東西の湾口部附近に局限され，大阪
府堺市や兵庫県加古川市，山口県山
陽小野田市などわずかしか知られて
おらず，しかも山口県では既に絶滅
している。

岡山県では，寄生虫研究者稲臣成一
による1953年の「児島湾沿岸」での
報告が唯一の文献記録で，岡山大学
医学部には「上道郡」（現・岡山市中
区・西区，吉井川～旭川河口左岸一
帯）とラベルされた大量の証拠標本
が現存し，当時は旭川または吉井川
の汽水域に多く見られたことが窺え
る。畠田和一コレクションにもここ
に展示した「上道郡津田村」の2個
体に加えて，実に90個体もの岡山県
産標本（詳細産地無記入）が含まれ，
後者のおびただしい個体数はやはり
当時の多産ぶりを示している。しか
し1960年代以降は死殻すら一切見出
されず，絶滅したことは確実である。

旭川・吉井川ともに河口の両岸全域が護岸されて直線化・単純化し，干潟
やヨシ原が失われて本種が棲息可能な場所自体が消失するとともに，排水
による水質悪化も壊滅的打撃を与えたとみられる。



ウネハナムシロ

Nassarius variciferus (A. Adams, 1852)

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：賊腹足上目：新腹足目：エゾバイ上科：オリレヨフバイ科)

展示標本： #929 [恐らく児島湾]

大規模な内湾奥の砂泥干潟下部～潮下帯に産し，表層を匍匐する。韓国南西部～中国沿岸では普通種で，近年も頻繁に記録されているが，日本では山口県のアマチュア研究者河本卓介が 1934 年に報告した時点で「多く発見せられず」，児島湾・周防灘・博多湾・有明海に「僅少の産出あるを知らるゝのみ」とされていた。その産出状況に基づき，宮地伝三郎らは本種を「大陸沿岸系種」の代表例に含めている。その後は長く再発見されず，1994 年に有明海最奥部の福岡県柳川市沖端川河口附近で久方ぶりに生貝の産出が報告されたが，同時期に同じ海域で中国原産の外来種 *Nassarius sinarum* (Philippi, 1851) カラムシロが見出されたこと，さらに中国からの輸入アサリに本種が混在していたことなどから，柳川市の個体群はカラムシロとともに国外から移入された可能性が指摘されている。したがって現在，確実に日本在来と認められる個体群は知られておらず，国内でほぼ絶滅したとみられる。

かつての児島湾は代表的な産地で，河本卓介は「タヒラギ漁船の網に掛つて上つて来るから比較的易く採集出来る由である（畠田 [和一] 氏談）」と記録し，のちに波部忠重が 1946 年の論文で歯舌の形態を公表した個体も，やはり児島湾産（宮地伝三郎採集）であった。また古川田溝コレクション（福井市自然史博物館所蔵）中にも同地の標本が現存する。畠田和一コレクションにはここに展示した標本のほか，「備前 [瀬戸内市] 牛窓」（「波部 [忠重] 氏同定 1952. 2.」，7 個体，#4313 (part)），「[倉敷市玉島] 黒崎村沙美」（1 個体，#5983），「[浅口市] 寄島」（「昭和 35 [= 1960]. 12. 4. 文比古と伴に」，2 個体，#2556），「[岡山市南区] 阿津」（「S [昭和] 27 [= 1952]」，1 個体，#6509）の各標本が含まれている。

しかし本県の個体群は，1959 年の児島湾閉め切りによって一挙に失われた。矢野重文は 1979 年，児島湖閉切堤防周辺で 100 個以上の本種を採集したものの「すべて死殻で摩滅しており，完全な個体は少ない」と述べ，この時既に絶滅していたと考えられる。古い死殻は現在も児島湖周辺の干拓地からハイガイなどととも掘り出され，高密度で多産していた往時の様子を知ろうじて今に伝えている。



キヌカツギハマシイノミ

Melampus cf. singaporensis L. Pfeiffer, 1855

(腹足綱：異鰓亜綱：被側区：汎有肺亜区：オカミミガイ目：オカミミガイ上科：オカミミガイ科)

展示標本： #2973 [岡山市東区] 西大寺西幸西 [吉井川河口左岸] 1957年

大規模な内湾奥の河口汽水域泥底に発達したヨシ原湿地周辺において、流木や転石など遮蔽物の下に *Ellobium chinense* (Pfeiffer, 1854) オカミミガイなどととも棲息する。もともと産地が局限されていた上に、湾奥の埋め立てや川岸の護岸などで塩性湿地が急激に減少し、棲息環境もろとも消滅しつつある。瀬戸内海では周防灘で産出が広く知られているが、それ以外での記録はごく少ない。

岡山県での本種の文献記録は皆無なのに対し、畠田和一が1956年にまとめた目録の中に同属の別種 *Melampus nuxeastaneus* Kuroda, 1949 ハマシイノミの記録がある。しかしハマシイノミは太平洋・日本海の外洋に面した海岸の岩礁飛沫帯に特異的な種で、瀬戸内海中央部では確実な産出例が他に全く知られていない。また、瀬戸内海産の本種をハマシイノミと誤って同定した文献は他にも存在する。このため畠田のいう「ハマシイノミ」も本種ではないかと推測されたが、従来は証拠の標本が見当たらなかったため想像の域を出なかった。

畠田コレクションが再発見された際、ここに展示した「ハマシイノミガイ」と畠田の直筆でラベルに明記された標本が見出され、それらは予測の通りハマシイノミでなくキヌカツギハマシイノミであった。したがって1950年代後半まで岡山県内に本種が棲息していたと確定できたが、同時に、本県で絶滅した多くの種の中に本種も加わることとなった。吉井川の河口は長い距離に渡って護岸されて直線化・単純化され、川の流速が増して土砂の堆積が妨げられたためにヨシ原はわずかな範囲にしか生じなくなり、底質も粗い砂礫が主体となった。この結果本種の棲息に適した場所は一掃され、現在の吉井川河口には、オカミミガイは棲息しているものの本種は全く見出されない。畠田標本はかつて確かに岡山県内に本種が産出し、もはや滅び去ってしまったことを示す唯一無二の証拠である。



ハイガイ

Tegillarca granosa (Linnaeus, 1758)

(二枚貝綱：翼形亜綱：フネガイ目：フネガイ上科：フネガイ科)

展示標本： #1371 [玉野市] 八浜町

大規模な内湾奥の潮間帯下部から潮下帯にかけて軟泥底層に棲息する。フィリピンなど熱帯域や中国大陸、朝鮮半島などでは現在も普通に食用に供されているのに対し、分布域の最北端に相当する日本では有史以来の干潟環境の消失や変質を象徴する種として頻繁に言及される。北海道函館から東北、関東地方に点在する縄文時代早期（約 6000 年前）の貝塚から化石が産出するため当時は北海道まで分布していたことが確実であるが、その後は着実に分布範囲を狭め、「昭和 10 [1935] 年ごろ」の時点で伊勢湾、三河湾、瀬戸内海、浦戸湾、有明海などに不連続的に産するのみであった。戦後になるとそれらの干潟も埋め立てや干拓など人為的改変によって相次いで縮小・消失し、水質悪化も相俟って棲息可能な環境が損なわれた結果、現在は有明海・八代海と伊万里湾の一部に残存するのみとなった。有明海でも 1997 年の諫早湾閉め切りによって本種約 1 億個体が一挙に死滅を強いられ、社会問題化したことは記憶に新しい。



これと同様に、岡山県でも 1959 年の児島湾閉め切りによって、本種は壊滅的な打撃を被った。それ以前の児島湾は有明海と並ぶ本種の代表的な産地の一つであった。岡山県内の貝塚から産出する種の構成を見ると、弥生時代ごろまでは本種はさほど多くはなく、むしろマガキやヤマトシジミが優占するものの、徐々に増加して安土桃山時代あたりに最盛期を迎える。江戸時代末期には重要な漁獲対象とされ、文久 2 (1862) 年に飼養が開始されて以降、種苗生産は隆盛を極め、清国へ輸出するまでに発展した。明治 35・36 (1902, 1903) 年度の『岡山縣水産試験場事業報告』には「伏老 [ハイガイのこと] ハ本縣ノ特有物産ニシテマタ重要水産物ノ一タリ」との記述が見える。また、日本産現生個体に対する学名 *Anadara* (*A.*) *bisenensis* Scheck & Reinhart, 1938 のタイプ産地は「Bisen, on the

Inland Sea, Okayama prefecture, Japan」(岡山県, 瀬戸内海に面した備前國)であるとともに, 吉良哲明の『原色日本貝類図鑑』に図示された標本(大阪市立自然史博物館に現存)も児島湾産である。畠田和一コレクションにもここに展示した玉野市八浜産標本のほか, 全国の蒐集家との標本交換用にストックされていたとみられる乾燥軟体が残存した合弁 44 個体が含まれる。当時の本種は食材としてのみならず, 貝人による研究・蒐集対象としても岡山県を代表する名産品だったのである。

しかしその一方で, 長い年月をかけて進められてきた干拓に伴って本種の棲む干潟は徐々に狭められてゆき, 現在の岡山市南区~玉野市北部の間に最後に残された個体群は, 1959 年の閉め切りによって遂にとどめを刺された。その後今日に至るまで, 岡山県内で本種の生貝が産出したという信頼できる記録はない。現在は, 淡水化した児島湖の湖底や周辺の干拓地(岡山市南区内尾など)の水田から, いまだ靱帯の一部が残存した本種の合弁死殻が時折見出される。それらは児島湾が閉め切られた 60 年前のその時に, その場所で生きていた個体であろう。

ササゲミミエガイ

Estellacar galactodes (Benson, 1842)

(二枚貝綱: 翼形亜綱: フネガイ目: フネガイ上科: サンカクサルボオ科)

展示標本: #6992 [玉野市] 八浜町地先, 1952年6月

大規模な内湾奥の潮間帯下部軟泥底表層に棲息し、有明海ではハイガイ等と同所的に見られる。干潮時には濡れた泥の上を、あたかも巻貝類のように匍匐して這い跡をつける。東京湾では戦後になって絶滅し、近年は周防灘(山口・福岡両県)と有明海・八代海の一部にわずかに残存するのみである。

岡山県からは波部忠重が1953年刊行の図録中に「Kojima Bay」(児島湾)産個体を図示し、これは本県から20世紀中になされた唯一の文献記録であるが、畠田和一コレクションにはここに展示した玉野市八浜産標本のほか、「[岡山市南区]阿津」(半片7個, #4547)及び「[岡山市東区]西大寺市水門」(「松本幸男氏ヨリ1956.4.5.」, 半片2個, #2078)からの個体が含まれている。

また、今世紀に入って児島湾干拓地(岡山市南区内尾, 中畦)の水田の泥中からハイガイ等とともに複数の死殻が掘り出され、また水門湾でのドレッジによっても古い殻や破片が水深1.4-1.8mの海底から採集されたことから、かつて児島湾とその周辺に個体群が存在したことは明らかである。しかしその後は生貝や新しい死殻は一切見出されず、本種の棲息に適した環境も現在の県内には存在しないため、1959年の児島湾閉め切りとともに完全に絶滅したと考えられる。



アゲマキ

Sinonovacula constricta (Lamarck, 1818)

(二枚貝綱：異齒亜綱：不完全齒上目：無面目：マテガイ上科：ナタマメガイ科)

展示標本： #2186 [岡山市南区郡] 甲浦村

大規模な内湾奥の軟泥干潟に特異的に産する。底泥に垂直に穴を掘って深く潜り、穴の長さは1 mにも達する。食用として広く知られる。有明海沿岸では縄文時代の貝塚からも殻が多く産出し、中世以降の飢饉の際にも食糧難の救世主として「お助け貝」と重宝され、1900年代の佐賀県では天然物と養殖を併せて1万トンを超える水揚高があった。しかし日本ではもともと産地が局限され、三河湾、児島湾、有明海、八代海からのみ知られていた。そのうち三河湾では近年の生貝の記録は一切なく、古い死殻が稀に見られるのみである。長く漁獲対象とされてきた有明海でも、1920年代には原因不明の大量斃死が相次ぎ、戦後は急激な減少の一途を辿って、1992年以降の漁獲量は遂にほぼゼロとなった。

一方、児島湾も多くの文献に有明海と並ぶ代表的な産地の一つとして挙げられてきた。1930年代前半、桂又三郎と畠田和一が岡山県各地で使用されていた貝類方言をまとめた際に、当時の県南部一帯で本種が「ホーネンガヒ、チンダエギヤ、チンポガヒ」などの名で呼ばれていたと記録されている。この時代はアゲマキ漁で生計を立てる人も多く、盛んに漁獲対象とされてきた。

しかし文献記録を繙くと、児島湾で知られていた個体群は在来でなく、明治時代中葉に有明海から人為的に移入されたものの可能性が浮上する。藤田経信が1913年に刊行した『日本水産動物学』には、「明治元〔1868〕年頃ヨリ佐賀県藤津郡ニテハ有明灣ニ之カ養殖ヲ企畫シテ成功セリ故ニ隣県皆之ニ倣ラヒ後岡山縣児島灣ニモ之ヲ移植シ今ヤ其蕃息ハ頗ル顯著ナルニ至レリ」とあり、もともと児島湾に本種がいたとは明記されていない。また1917年に有明海での本種の大量斃死について論じた北原多作・宮田彌次郎の論文においても、「児島灣には明治二十五〔1892〕年及二十六年に有明海より移植して以来繁殖してゐる」と記され、しかも彼らはその直後に「朝鮮の仁川附近には此貝の自然産のもの多し」との一節を置いていることから、少なくとも北原と宮田は児島湾産を全て人工的な移植に由来するものと認識していたと考えられる。さらに上記の通り有明海沿岸の縄



文時代の貝塚からは本種の殻が見られるのに対し、児島湾周辺の貝塚ではハイガイは大量に産出するものの本種の明確な記録はない。したがって現時点では、江戸時代以前から児島湾に本種の在来個体群が存在していたことを積極的に支持する証拠は見出されていない。

ただし、移入か在来かは別としても 1890～1950 年代に本種が児島湾に高密度で多産し、そして 1959 年に湾が閉め切られて淡水化した際に完全に棲息環境が失われ、一挙に絶滅したことは事実である。現在、児島湖の湖底を浚渫すると本種の崩れかけた合弁死殻が時折見出され、往時の多産ぶりをかすかに伝えているが、もはや岡山県内に本種の棲息が可能な場所は残されていない。

チリメンユキガイ

Meropesta sinojaponica Zhuang, 1983

(二枚貝綱：異齒亜綱：不完全齒上目：バカガイ上科：バカガイ科)

展示標本： #1920 児島湾 昭和10 [= 1935] 年頃入手 1952. 6. 25. 黒田
[徳米] 氏同定

現在の日本で、生貝を見出すのが最も困難（事実上不可能）となった海産二枚貝類の一つである。化石としては横浜市・愛知県高浜市・大阪市などの更新世（洪積世）・完新世（沖積世）の地層から産出し、横浜では約6000～5500年前の短期間、大阪では約6700～2300年前に棲息していたとされる。しかし現生個体の産出記録は児島湾と有明海に限られている。2002年に有明海の熊本県宇土市長部田で、



湾奥に広がった砂泥干潟（ハマグリが多産する）の下部に複数の合併死殻が生時の姿勢のまま埋もれている様子が確認されたことから、同様の環境に棲息していたらしいが、それ以上の詳しい情報は全く得られていない。

実のところ、ここに展示した畠田和一標本こそが、本種の日本最後の確実な生貝産出例であり、この個体は畠田自身が雑誌『夢蛤』の1953刊行の誌上に「非常に美しい殻ハダをした生貝ですが、フチが小破損したもの僅か1個」と述べ、採集時に生きていたと明言している。又標本の左殻腹縁が破損している点も記事の記述に合致する。これ以降、本種は日本全体を見渡しても生貝が報告されたことは一度たりともない。

その後、宮地伝三郎らは1953年の論文は「ハブタエガイ [原文ママ]」が児島湾に産するとし、同時に「チリメンユキガイ」は「大阪（化石）、同種が南方に現存」とのみ記した。これは畠田が得た個体を同属の別種ハブタエユキガイと取り違えたものと想像される。さらに肥後俊一による日本の海産貝類総目録（1973年）も恐らくは宮地らに引きずられたらしく、ハブタエユキガイの分布域を「瀬戸内海（児島湾以南）」とし、その後の文献も同様にハブタエユキガイが児島湾に産したごとく記しているが、それらは全て畠田による本種の記録を誤認したものと考えられる。これらの混乱が生じたのは、本種の実物を目にした経験をもつ人が本種自体の消滅とともにいなくなったことも一因であろう。

本種は上記の通り約2300年前までは関東以南の太平洋岸各地に棲息していたものの、その後自然に衰退し（この点はハイガイ等に似ている）、戦前の時点で既に児島湾と有明海などわずかな内湾に個体群が局限されていたと推測される。しかし児島湾の干潟は1959年の閉め切りによって大半が一挙に失われ、それを機に本種は県内で確実に絶滅した。有明海でも生貝が再発見されないままの現状では、もはや本種は国内から滅び去った可能性もある。畠田和一が戦前の日本で唯一人本種の生貝に成功し、今や二度と再入手できないその標本を現在まで伝えたことは、彼が貝類学上に成しえた最大の功績の一つである。

ウラカガミ

Dosinia corrugata (Reeve, 1850)

(二枚貝綱：異齒亜綱：不完全齒上目：マルスダレガイ上科：マルスダレガイ科)

展示標本： #4259 [岡山市東区] 犬島

大規模な内湾奥の軟泥干潟下部帯から潮下帯に棲息する。かつては東京湾、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、八代海など各地に見られたが、近年急速な衰退傾向に転じ、1990年代末まで多産していた天草短諸島でもこの期間でほとんど消滅した。21世紀に入ってから



の生貝の確認例は、2008年の名古屋港沖の1例しかない。

岡山県は本来本種の多産地の一つで、1930年代に県内の貝類方言をまとめた桂又三郎が、当時「小田郡笠岡町」(現・笠岡市)で「シラカイ」と呼ばれていた種として描いた絵は、紛れもなく本種である。また古川田溝と山本愛三がそれぞれ蒐集したコレクション(それぞれ福井市自然史博物館と西宮市貝類館)には「備中[浅口市寄島町]安倉」、「寄島町」産の標本が含まれる。

畠田和一コレクションにはここに展示した犬島産のほか、「備中[笠岡市]金浦村」(1個体, #4528), 「児島湾[玉野市]八濱町地先干拓地×切内側泥揚場採集」(「1952.6.3.」, 化石1個体, #6845)が現存し、これら全てが合弁で、1950年代ごろまでは特に稀少ではなかったと推測される。しかしその後は、ドレッジ等を用いても著しく古い半片や破片がわずかに得られるのみで、生貝はおろか合弁死殻すら一切見出されていない。本県では特に児島湾・笠岡湾の干拓や水質汚染などによる干潟の環境攪乱が本種に致命的な打撃を与え、1980年代ごろまでには既に絶滅していた可能性が高い。

ハマグリ

Meretrix lusoria (Röding, 1798)

(二枚貝綱：異齒亜綱：不完全齒上目：マルスダレガイ目：マルスダレガイ上科：マルスダレガイ科)

展示標本： #1637 [備前市] 和気片上

内湾において河川からの淡水流入がある砂泥干潟中・下部～潮下帯上部に産する。日本の食用貝類の代表例として広く知られた種であるとともに、近年激減したことで干潟環境の変質と悪化を象徴する存在となった。特に本種の棲息環境は市街地に隣接して存在することが多いため開発や汚染の直撃を受けやすく、1990年代以降には全国各地で個体群の縮小または消滅が次々に伝えられた。例えば相模湾



では1974年を最後に生貝が確認されず、東京湾では一旦絶滅し、人為的に移入された個体が見られるのみである。また朝鮮半島・中国大陸からの移入種 *Meretrix petechialis* (Lamarck, 1818) シナハマグリとの交雑による遺伝子攪乱も指摘されている。瀬戸内海でもかつてはごく普通に見られたが、現在個体群が比較的健全な状態で維持されているのは西部の周防灘などわずかな範囲にとどまる。香川県での2009～2013年の調査結果によると、「燧灘では死殻が普通に採集され生体も比較的普通に採集されるが、備讃瀬戸では新鮮な死殻及び生体が採集されることはほとんどなかった」とされる。

岡山県では1932年に桂又三郎が当時の「浅口郡大島村」(現・笠岡市西大島)で「ヨメノサラ」と呼ばれていた種として、明らかに本種とわかる絵を示している。その後も岡山大学の玉野・牛窓臨海実験所が作成した貝類目録にも掲載されていることから、戦後しばらくは他の都府県同様に多産していたと推測される。畠田和一コレクションにはここに展示した備前市和気片上産個体のほか、「備中高橋[＝高梁]川尻」(合弁1個体, #1638), 「[倉敷市] 辻島[恐らく連島の誤記]」(合弁1個体, #1639), 「[笠岡市] 白石島」(「1954. 8. 20.」, 半片1個, #5830)の各標本が含まれる。このうち白石島産以外は全て合弁で光沢もよく保存されており、生貝を採集したものと推測される。

しかし21世紀に入ってからの20年で、岡山県では生貝どころか合弁死殻も一度も見出されておらず、光沢が完全に失われた化石様の半片や破片がわずかに見られるだけである。本種がかつて棲んでいたはずの湾奥部や河口周辺はことごとく埋め立てや護岸あるいは浚渫がなされて干潟が消え、さらに水質の悪化が席捲して棲息条件が損なわれた。本県でも東京湾や相模湾などと並び、もはや本種は絶滅したと考えざるを得ない。

ハナグモリ

Glauconome angulata Reeve, 1844

(二枚貝綱：異齒亜綱：不完全歯上目：マルスタレガイ目：シジミ上科：ハナグモリ科)

展示標本： #1834 岡山市〔北区〕青江

大規模な内湾の奥部において、淡水が流入する泥干潟の潮間帯上～中部に棲息し、干潮時は水がなくなる部分にも多産する。東京湾では江戸川放水路や小櫃川河口などから近年も棲息が確認されているが、相模湾・三河湾・伊勢湾などでは見出されず、絶滅またはそれに近い状態にあるといわれる。瀬戸内海では西端の周防灘西部に今なお多いが、それ以外では少ない。兵庫県高砂市の加古川河口右岸では2009年に少数の生貝が確認されており、少なくとも10年前の時点では兵庫県には個体群が存在した。



岡山県では畠田和一が1935年刊行の報告において、「御津郡〔正しくは児島郡；現・倉敷市〕福田村」において、附近の住民が本種を「スナガヒ」という方言で呼んでいたと記録しており、当時のごく普通種であったと推測される。また福井市自然史博物館所蔵の古川田溝コレクションにも「備前〔岡山市南区〕福浜」産の標本が含まれている。福浜は旭川の河口に相当し、1950年代頃まではそこでタケノコカワニナが多数採集されていた。上記の加古川でもタケノコカワニナが産出しているため、この2種はかつての瀬戸内海では完全に同所的に産するとまでは言えないまでも、多くの場合同じ川の汽水域で随伴していたと言えよう。畠田和一コレクションにもここに展示した岡山市青江産のほか、「備中〔岡山市東区〕水門」(「昭10 [= 1935]. 2. 9.」, 合弁1個体, #2059)の個体、さらに産地無記入であるが県内産の可能性が高い合弁1個体(#7366)が現存する。

しかしその後の岡山県では、古い死殻すらも全く確認できないまま今日に至っている。本種は河口部汽水域においても水面から離れた潮間帯の上部にまで産するため、もし個体群が維持されているならば比較的容易に見出されるはずである。もう50年以上にわたって一切採集されないのは、岡山県では完全に絶滅したからと考えられる(これはタケノコカワニナも同様)。本種の減少要因は何より埋め立て・干拓・護岸による干潟の消失であり、旭川や吉井川の河口において川岸の過剰な一様化と単純化がなされた結果、棲息可能な場所を失って岡山県から姿を消した。今後県内の河口部泥干潟の環境状態が改善するならば、兵庫県など近隣他県から新たに加入してくる可能性も否定はできないが、現時点では残念ながら、その兆しは見られない。